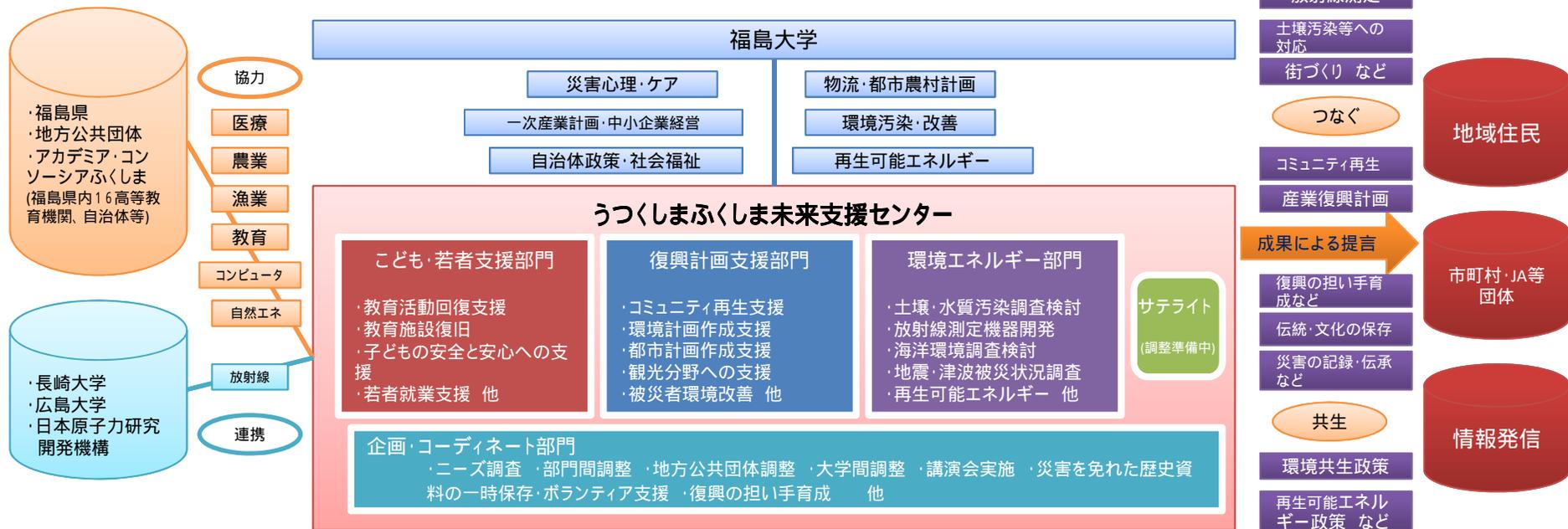


「福島大学うつくしまふくしま未来支援センター」設置

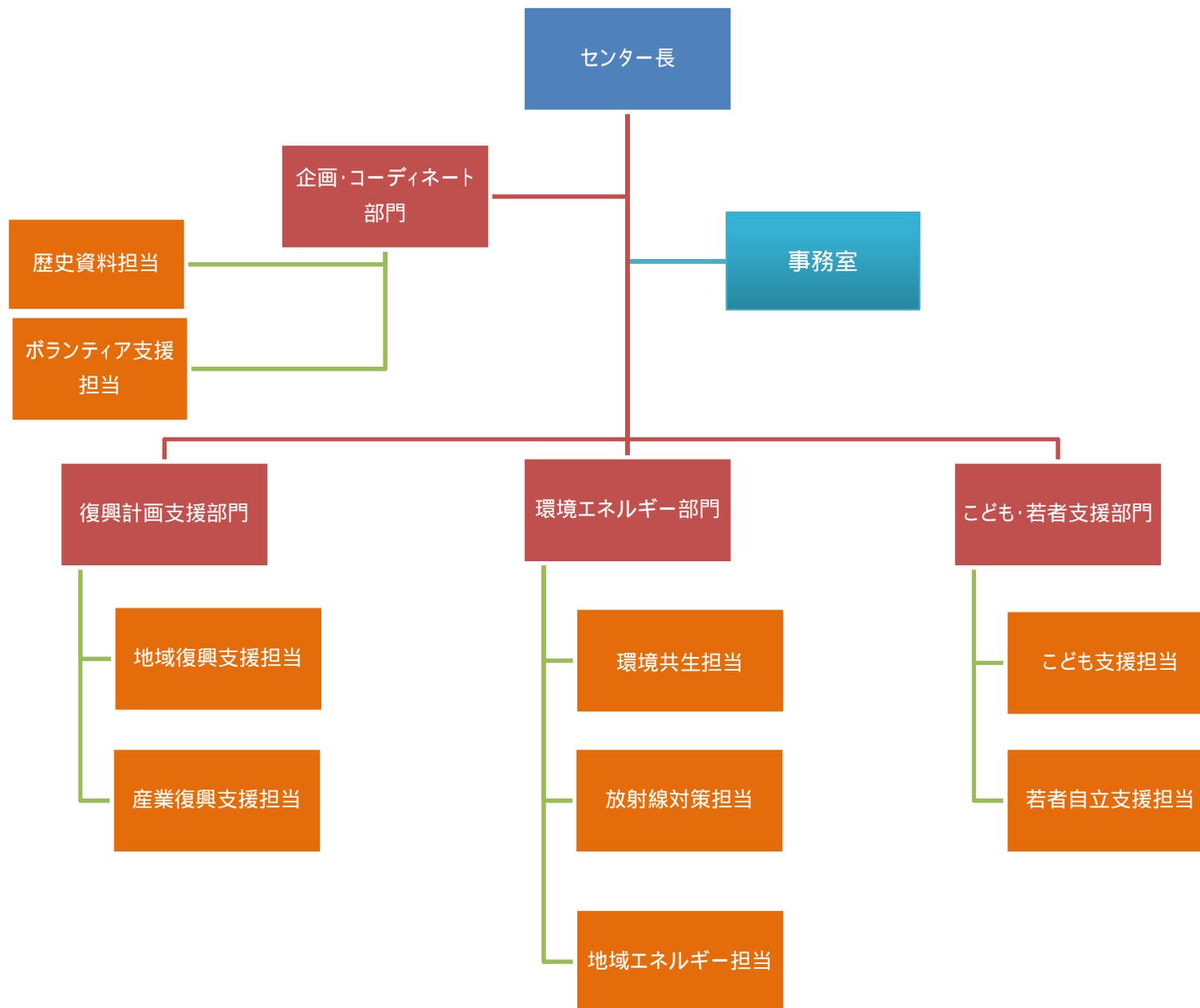
【現状と課題】



【概念図】



福島大学うつくしまふくしま未来支援センター組織図



センタースタッフ

2011年9月20日現在

学長特別補佐(うつくしまふくしま未来支援センター担当) 山川 充夫	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 経済経営学類 国際地域経済専攻 教授 •[専門分野] 地域経済論・経済地理学
企画・コーディネート担当マネージャー 丹治 惣兵衛	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 地域創造支援センター 教授
地域復興支援担当マネージャー 丹波 史紀	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 行政政策学類 地域と行政専攻 准教授 •[専門分野] 社会福祉論
産業復興支援担当マネージャー 小山 良太	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 経済経営学類 国際地域経済専攻 准教授 •[専門分野] 農業経済学、地域経済学、協同組合学
環境共生担当マネージャー 柴崎 直明	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 共生システム理工学類 環境システムマネジメント専攻 教授 •[専門分野] 地下水盆管理学、水文地質学
放射線対策担当マネージャー 河津 賢澄	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 共生システム理工学研究科 研究プロジェクト型実践教育推進センター 特任教授 •[専門分野] 環境政策、エネルギー政策
地域エネルギー担当マネージャー 佐藤 理夫	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 共生システム理工学類 産業システム工学 教授 •[専門分野] 製造プロセス、化学工学
こども支援担当マネージャー 森 知高	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 人間発達文化学類 人間発達専攻 教授 •[専門分野] 体育科教育
若者自立支援担当マネージャー 五十嵐 敦	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 総合教育研究センター 教授 •[専門分野] 職業心理学、キャリア発達心理学
歴史資料担当マネージャー 菊地 芳朗	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 行政政策学類 社会と文化専攻 准教授 •[専門分野] 考古学
ボランティア支援担当マネージャー 鈴木 典夫	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 行政政策学類 地域と行政専攻 教授 •[専門分野] 地域福祉
事務部門 事務室長 千明 精一	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 地域連携課長
事務部門 山崎 裕	<ul style="list-style-type: none"> •[兼 務] 財務課副課長

部門長は当面空席とする。

●金曜日だったので(宿題があまりない?など?)来る子どもの人数も少なく、自分の勉強道具も持参せずに遊びに来る感覚でした。あのスペースを「勉強する場所」という雰囲気これから作ってあげたいと思いました。

子どもたちはとても元気でしたが、中には言葉も行動も乱暴な子がいました。2年生の女の子がみんなのことを叩いて危ないと思ったので物を取り上げようと思ったら、ぬいぐるみを投げつけられ、バカ!と言われ驚きました。

2年生の女の子は自分の名前を教えたりませんでした。なぜなのか気になりました。ぬいぐるみと似た名前をずっと言い張り、持ち物に書いてあった名前を見て「この名前じゃないの?」と聞いたら「これはお兄ちゃん」と言いました。ただ明らかに女の子の名前だったので多分嘘だったと思います。

男の子に「被ばくした?」と聞かれ戸惑いました。その場では「してないよ。」と答えましたが、子どもたち自身は、被ばくということとどのように受け止めているのか気になりました。「よかったね。」と言われたので、自分は被ばくしたと誤解してしまっているのかと心配になりました。

●「ちょっと目つぶって」と子どもに言われて、私は目をつぶった。「いいよ」と言われ目を開けると、忍たまめり絵の乱太郎、きり丸、しんべえが手にビールをもっているではないか!!

私はめり絵コーナーのお手伝いをしていました。そこに2人の姉妹が来てくれ、私は姉妹と一緒にめり絵をしていた。お姉ちゃんの誕生日は3月11日だということ、2人の通う小学校が地震で被害を受けたため今は違う小学校に行っていること、2人の将来の夢のこと、いろいろ話をしてくれました。短時間でも、一緒にめり絵をしたことで、話しやすくなったのではないかと思います。

●私は、避難所での生活を客観的に見ているだけなので、見当違いかもしれないが、同じ空間で共同生活をしているようで、どこか分断化されているように感じる。お互い顔も名前も知らない人たちが集まっているので当然なのかもしれないが、広く関わりを持っている人は限られているのではないかと感じた。そのため、今回のような企画は、そのような状況を抜け出し、子ども・高齢者など避難している大人・私たち学生が集まる1つの交流の場となったのではないだろうか。やはり、このような状況下でも今を必死に生きる子どもの姿から、元気や何かパワーのようなものをもらえるように思う。

●前回に行ったときは違う顔ぶれの子どもたちが多く、驚きました。最初のときに会った女の子がいたので「元気だった?私のこと覚えてる?」と声をかけたら、「覚えてるよ。前一緒に来たN子ちゃんはアパートに行っちゃったから、今日は私だけなの。」と言われました。N子ちゃんはこのアパートの行ったのか、今も同じ学校に通っているのかなど気になることはたくさんありましたが、もちろん聞くことはできません。どこか寂しげなその子には私は何と答えてよいのかわからず、ただ「そっか。」と言っただけでした。私にはこの女の子の気持ちをはかり知ることはできません。各家庭によって状況は異なるため、被災してきた後も日々状況が変わるのだと思います。その中にいる子どもたちはどんな気持ちでいるのでしょうか。

女の子と一緒に遊んでいるときは楽しそうにしていたので、よかったです。帰り際に「また遊ぼうね。」と言ってくれました。わずかな時間しか遊んであげることができませんが、それで少しでも子どもたちの気晴らしになるのであればうれしいです。

●子どもたちは話に聞いていた様子よりも落ち着いていると思いました。私が勉強を見ていた2年生の男の子は、勉強をやってから~しようね。と言うと、集中して勉強していました。勉強の後、ガムテープゴマ作りをしました。とても楽しそうな様子でした。以前からコマには親しみがあったようで、器用に回していました。やはり子どもたちと少しでも早くつながるには遊びが欠かせないのだと思います。もうと、遊び相手になれる時間が欲しいと思いました。別れ際に、「また今度違うコマも教えてあげるね」というと、「いつくるかわかんないじゃん」と少し寂しそうに言われました。「今度はいついつ来るね」と別れるときに言えたら、子どもたちはもっと安心して心を開いてくれるんじゃないかと思えます。

以前あづまに行った時も「次いつ来るの?」と聞かれました。次くらいの予定が分かるようにできたらありがたいです。

●初めて参加しました。

避難所に行くのも初めてでしたので、どのような雰囲気なのかどのように子どもたちと接すればよいのかが分かりませんでした。そして子どもたちの言葉の荒さに驚きました。そのことは事前に知っていたものの、現状は想像をこえていました。

きっと学校や家族の前では見せない姿なんだろうなと思います。その言葉を発することで子どもたちの抱える不安不満ストレスなどが発散されるなら、むしろ言いたいだけ言ってもらった方がいいのかなと思いつつ、荒い言葉を発することは普通は良いことではないのでどうすればよいのか悩みました。

また学習支援ボランティアとして参加しているので、学習支援をちゃんとやりたかったなという思いもあります。遊びからの学習への切り替え方や、うまく学習へ誘導する方法なども考えなければなりません。帰る直前になって宿題などをやりはじめる姿もあって、それは私たち大学生ともっと一緒にいたいという思いの表れであると思いました。その思いを受け止めつつ時間までにやり終えることも忘れてはいけないと思います。

●帰り際に、私に声をかけてくれた男の子がいました。「ぼくね、サッカーできるんだよ。」「この前ここでね、かくれんぼしたんだよ。」と言って、部屋の隅の狭いスペースに入っていました。限られたスペースで子どもたちなりに工夫をして、遊びを見つけているのではないかと思います。その子が私に声をかけたのは、遊んでほしいからだったのかもしれない。遊んであげたいのはやまやまですが、時と場所をわきまなければなりません。思いっきり遊びたいに違いない子どもたち。サッカーも今はできないと思います。そのような子どもたちに私たちができることは限られています。もどかしさを感じました。

自分の家を離れ、新しい学校に通うことになり、不意に新しい環境におかれることになった子どもたちは、少なからずストレスを抱えていると思います。私には子どもたちの気持ちを量り知ることはできません。しかし、知ろうとしなければなりません。ほんの少しでも子どもたちのストレスを減らすためにはどうかかわってあげようか、考えていかなければならないと思いました。

●今回私が印象に残ったのはやはり最後に学習スペースに来たYちゃんのことです。最初は私たちが帰らないよわがままを言うだけかとも思いましたが、宿題を終わらせないと帰れないという言葉から少し追い詰められている感じを受けました。家族のことは詳しくは聞けなかったのですが、もしかしたらお家の方は震災で学習が遅れた分を心配しているからかもしれないし、お家の方自身も震災で疲れていると思います。家庭で子ども達が以前のように安心して過ごせるような環境がいち早く整えたいのと思いました。



2011
3.11

人間発達文化学類

東日本大震災教育支援プロジェクト

子ども支援ボランティア

—学習・遊び・生活支援—

後援 福島県教育委員会 福島市教育委員会 郡山市教育委員会

福島の子どもたちに 本当の笑顔をとりにどすために

——まで一の力で〈学力・教育・文化〉再生を!——

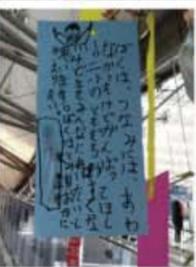
福島大学・人間発達文化学類は、東日本大震災からの復興、特に、福島の宝となる子どもたちの成長を応援するために、「まで一の力で〈学力・教育・文化〉再生を!」として、子ども支援プロジェクトを展開してきました。「まで一」は東北地方各地に見られることばであり、「ていねいに・心を込めて」という意味で使われる場合があります。ここでは、生産効率やその速さを求め続けてきた経済至上主義社会に対する警鐘の意味を込めて用いています。

プロジェクトでは、発災直後の福島大学避難所の避難者への学習支援や生活支援を皮切りに、大学図書館の復旧や避難物資の搬入支援などを行いました。

そして5月、避難所の子どもたちの学習支援や遊び支援の学

生ボランティアを組織するためガイダンスを開催したところ、大学が未再開であるにもかかわらず、120名もの学生がボランティア登録してくれました。しかもその多くは、教育実習を間近に控えた3年生と、就職活動の渦中にある4年生でした。「福島の子どもたちに笑顔をとりにどす」ために結成された「子ども支援プロジェクト」は、あづま総合体育館、土湯温泉、飯坂温泉、ビッグパレットふくしま、郡山養護学校、磐梯熱海温泉へと、活動拠点を広げていきました。

内容も、学習支援や遊び支援活動、炊き出しなどの生活支援、



そして子ども祭のサポートやものづくり活動など、多岐に及びます。4月下旬から7月末までで、ボランティアの実施回数は90回を数え、参加した学生ボランティアは延べ300人、サポートした子どもたちは700人を数えます。

さらに、活動を記録するサイトを立ち上げ情報を交換し、交流会を実施しながらケーススタディを行ってきました。

今後の活動は、避難所から仮設住宅へと移ります。NPOや関係機関との協力の下に、長期的に展開していきます。

※ボランティアのwebページ:

http://web.me.com/hiroki miura/volunteer/volunteer_blog/volunteer_blog.htm



〈子ども支援ボランティアの経緯〉

- 5月6日 学生ボランティア募集のガイダンスを実施
- 5月25日 学習支援・遊び支援に関わる教員の情報交換会を実施
- 6月8日 学習支援・遊び支援に関わる教員の情報交換会を実施
- 6月13日 人間発達文化学類東日本大震災教育支援プロジェクトのWebサイトを開設
- 6月15日 「人間発達文化学類 学校支援プロジェクト まで一の力で〈学力・教育・文化〉再生を」の記者発表
- 7月6日 学生ボランティア募集(第2回)のガイダンスを実施
- 7月12日 支援活動の今後の展開について対応を検討
- 8月3日 「福島市夏休み体育館開放事業」「福島市の子どもたち・夏のリフレッシュ体験事業」のボランティア募集の説明会を実施
- 8月7-9日 被災者支援対応・自然体験学校を実施



自分にできることを探し求めた日々 人間発達文化学類生 4年 S.Y

●福島への思い

震災が起きた翌日、家族が迎えに来て県外出身の私は一人福島を去ることとなり、心の中でずっとそのことを悔やんでいた。大好きな福島は私の友人の多くが故郷とする場所で、宮城や岩手出身の友達も多かった。私の町も震災の被害はあったが、多少の不便はあるものの復興に向けてすぐに動き出していた。福島では多くの被災者、子どもたちが各避難所において様々な困難の中で生活していることをメディアや友人からの情報で聞いていた。「何か自分にできることはないか」と、ずっと福島のことが頭から離れなかった。しかし、そこに行って何かできるわけでもなく、毎日自分の無力さを感じる日が続いた。

そんなある日、私の町で行われた支援物資の箱詰め作業に携わらせてもらった。そのときに、この物資がだれかのもとにたどり着くのか、必要なものが必要なところに届くのかという疑問が浮かんだ。「送って終わり、それで済むわけではない……他に自分ができることは何もないのか……。」いくらそう思っても時間がたつて福島に戻れること、それを待つことしかできなかった。

●「いま」できること

4月下旬、福島に戻ってすぐ、人間発達文化学類でボランティア組織を立ち上げるという計画を知った。反射的に「やりたい」と思い、登録をした。そこには、誰かのために何かをしたいという漠然とした思いと、一人では何もできなかったことへの悔しい思い、その両方があった

と思う。自分に被災した子どもたちの学習や遊びの支援ができるのか……という不安もあったが、子どもたちといることで、きっと自分自身も何かを得られるのではないかと期待もあった。止まてはもらえなかった。そこに子どもがいるのなら、自分が「いま」できることを尽くしたいと心から思った。

2ヶ月間、様々な場所にボランティアに行き、子どもたちと触れ合う中で、ボランティアを行う動機は少し変化していったように思う。子どもと一緒に時間を過ごすこと、子どもの学習のつまずきを看取り一緒に考えていくこと、全身を使って遊ぶこと……子どもの真剣な表情や満面の笑みを見ること、そういったことが楽しみになっていった。

大学4年生なので自分の進路とも向き合わなくてはいけない時期もあった。しかし、いま目の前で「学びたい、遊びたい、誰かとつながりたい」という子どもたちがいるのに、その子どもたちと向き合うことなしに、将来の自分が教師として働くことは想像できなかった。実際、教員採用試験の勉強をしても、震災で県外に出ていくこととなった子どもや、避難生活を強いられている子どものことばかり考えていた。だからこそ、子どもと過ごしたかったし、子どもと接している時ほど充実している時間はなかったと感じるくらいだった。

●笑顔、別れ、死…… 避難所の子どもたち

一連のボランティア活動で印象に残っているのは次のようなことだ。一つ目に、「子どもの笑顔」がとても印象に残っているということ。どのボランティア先でも子どもたちの明るい笑顔があった。もちろん、

いま社会で起こっていること、今後の生活についての認識は、大人に比べて低いから笑っていられると考える人もいるだろう。でも、子どもたちの心は震災でたくさんの傷を負っていた。家族、友達と離れ離れになって、慣れない場所での生活でストレスがないわけではない。それでも、子どもの持つ豊かな情緒や感性、好奇心や柔軟な発想が子どもたちに、キラキラした笑顔をもたらし、その笑顔が大人を勇気づけるパワーを持っていると強く感じた。子どもの、素直で無邪気な笑顔ほど美しいものはないな……そして、一時的ではあれ、そんな子どもたちと一緒にいられること、それが本当に幸せだと心から感じていたし、子どもたちには感謝の思いでいっぱいだった。

二つ目に、ボランティアで出会った Nちゃんが、1学期で転校してしまおう Kちゃんに向けて書いていた「離れてもずっと友達だよ」というメッセージが忘れられない。二人は、ほぼ毎回、一緒に学習会に参加していた。もともと、違う地域出身で避難所にきて仲良くなったという。何も知らない場所で、できた友達との別れを Nちゃんはしっかり受け止めていた。子どもは強いな……と思った。NちゃんやKちゃんだけではない、この夏休みを機に県内外に転校していく子どもは多く、約1000人の子どもが福島から他県に移動するという。一緒に笑ったり、泣いたり、様々な時間を共有してきた大切な人とのたくさんの別れが来るのかと思うと苦しくなる。子どもたちへの心の支援の必要性を感じる。まだまだ、子どもの問題は進行形だ。

最後に、ある子どもに「おねえちゃん、〇〇さんに似てるね!! ……死んじゃったけど……。」と言われたのが衝撃的だった。とくに悲しい

表情をしていたわけでもなく淡々と「死」を口にすることは、この子以外にもいた。この震災を通して、「死」というものが一気に身近なものになったのかもしれない。子どもだからわからないのではなく、子どもだってわかってるし、感じている。その思いや感情を周囲の大人がくみ取っていかなくてはならないと強く思った。

●4年間の学びの証として

学内だけでなく、他大学や他県のボランティアの方々と交流する機会もあり、様々な考えに触れたことも貴重な経験となった。その中で強く感じたことは、ボランティアとはあくまで自立支援の一環であって、私たちができることは限られている。だからその場の子どもへの思いに寄り添うことは重要であるが、そのなかにも自分がやろうとすべき方針を明確に持つこと、支援をする側がこうしたいという意思も同時に大切であり、子どもを引き込むようなアクションを意図的に起こすことが重要であると感じた。

子どもたちへの支援は、私がこの福島県に来て子どもや教育について学び、考え、取り組んできたことへの証のようなものだ。あきらかに4年前の私にはできないような考え方で子どもたちを見つめながら、子どもたち一人ひとりを支援できる私がいるのを実感することができた。子どもたちの状況や変化だけでなく、自らの成長を実感できたまさに「1000年に1度」の、何ものにも代えがたい経験だったと思う。

うつくしま福島未来支援 センターの取り組み

福島大学 丹波史紀

災害復興研究所として

- センター設置を待つことなく、プロジェクトとして被災地の復旧・復興に貢献しようと教員有志が「災害復興研究所」を設置
- 主な活動として
 - 被災者実態把握（避難所実態調査・県外避難者調査・双葉8町村住民実態調査など）
 - NPO・ボランティアなど被災者支援のネットワークづくり
 - 研究者・専門家も交えた定期的な研究会の開催
 - 自治体の復興計画策定支援
 - その他
- センター開設をうけ、地域復興支援部門としてセンターの一翼を担う

被災者実態調査等

- 東京都に避難した県外避難者200世帯の実態調査
- 仮設住宅・ホテル旅館での実態把握
- 双葉8町村の全住民実態調査（約3万世帯）

被災者支援ネットワークづくり

- 6月11日「東日本大震災震災復興シンポジウム」の開催
- 7月20日 NPOや青年会議所などと被災者支援のための「ふくしま連携復興センター」を設立
- 関西学院大学などとともに県外避難者支援のためのネットワーク化のためのプロジェクト



支援者や専門職との研究会の開催

- 6/15 県内の協同組合関係者と福島大学の各種災害プロジェクトの活動報告と意見交換
- 7/12 「県内大規模避難所女性専用コーナー運営の経験から」(ジェンダー部会)
- 7/30 「震災復興—安全・安心な暮らしを求める権利擁護と自立生活支援」(社会福祉学会)
- 8/6 「福島・阪神専門家・研究者交流懇談会」(弁護士や不動産鑑定士等)
- 8/10 東北車座トークキャラバン(日本災害復興学会)
- 8/19 定例研究会「災害救助法を始めとする災害復興法制の運用と課題」
- 9/7 定例研究会「双葉郡の歴史と原発事故以降の現況」



外部資金活用

- 仮設住宅等のハード・ソフト面を含む統合的生活環境改善の取り組み(JST東日本震災対応・緊急研究開発成果実装支援プログラムに選定) H23年度 約1000万円
- 三井物産環境基金「大震災にともなう福島県の広域避難者に対する緊急実態調査と生活再建に関する研究」H23~25年度 約1800万円
- エスエス製薬株式会社との協定 「東日本大震災復興支援」 約2億円以上



今後の展開

- 被災者支援団体と民間借り上げ(みなし仮設)に住む住民と仮設入居者のつなぎ直し(コミュニティ形成)
- 県外避難者の実態把握と「被災者支援センター」(仮称)の設置
- 双葉8町村住民実態調査をふまえた双葉地方全体を復興計画支援
- 福島県と各研究機関、専門職団体等と「福島県応急仮設住宅等の生活環境改善のための研究会」の設置

テーマ：「ふたばはひとつ」
～双葉地方のまちづくり・未来づくり！～

美しい「海と緑」の豊かな自然と温暖な気候に恵まれた双葉地方は、農業など第一次産業をはじめ、企業誘致による新たな産業の展開や交通網の整備計画等、人々の暮らしに密接に関わるいろいろな事業が展開されてきました。また、地域としての独自性を確立しながら、近隣の地域との交流を進め、人々が豊かに暮らす双葉地方として一層の飛躍への期待がありました。

しかし、3.11東日本大震災と福島第一原発事故によって甚大な被害を受け、双葉地方の状況は一変し、住民は大変厳しい環境下での生活を強いられています。

このシンポジウムは、「ふたばはひとつ」をテーマとして、双葉地方のまちづくり・未来づくりについて考えます。双葉地方の復興の担い手である中・高校生による意見発表、著名な専門家による基調講演に続いて、双葉地方の各種団体の代表をパネリストとして迎え、一刻も早い帰郷の実現に向けた復興計画や環境整備について語り合い、夢と活力にあふれる新しいまちづくり・未来づくりについて参加者とともに考えます。

日時：平成23年10月2日(日) 13:00～16:30

会場：福島大学共通講義棟L-4教室 (収容人員360名)

所在地：福島市金谷川1番地 (JR金谷川駅下車徒歩10分)

- 【第1部】 主催者挨拶 福島大学長 入野 修 13:00
中学生及び高校生による発表 13:10～13:30
- 【第2部】 基調講演 13:30～14:30
演題：「これからの復興に向かって」
講師：関西学院大学総合政策学部教授、日本災害復興学会会長
室崎 益輝氏
休憩
- 【第3部】 シンポジウム：「ふたばはひとつ」 14:45～16:30
～双葉地方のまちづくり・未来づくり～
<パネリスト>
・自治体の代表
・商工会又は産業会の代表
・青年会議所の代表
・子どもを持つ親の代表
・福島大学行政政策学類准教授 丹波 史紀
- <コーディネーター>
・うつくしまふくしま未来支援センター長 山川 充夫
- <コメンテーター>
・基調講演講師 室崎 益輝氏

() 事前の参加申込み不要

主催：福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

共催：双葉地方町村会、双葉地方町村議会議長会

後援：福島県、福島県教育委員会、地元新聞各社等 (順不同)

【お問い合わせ先】福島大学うつくしまふくしま未来支援センター事務室

024-504-2865 Fax 024-504-2865

E-mail: fure@adb.fukushima-u.ac.jp

わたしたちのふるさと、双葉地方。

美しい「海と緑」

豊かな自然

温暖な気候

東日本大震災・福島第一原子力発電所災害復興支援
「双葉地方住民による震災復興シンポジウム」

ふたばはひとつ

～双葉地方のまちづくり・未来づくり！～

一刻も早い帰郷の実現に向けた復興計画や環境整備について語り合い、
夢と活力にあふれる新しいまちづくり・未来づくりについて考えます。

日時 平成23年

10月2日

13:00～16:30

会場 駐車場あり

福島大学
共通講義棟
L-4教室

福島市金谷川1番地（JR金谷川駅下車徒歩10分）

定員**360**名
事前申込み不要

Program

【第1部】 13:00 主催者挨拶 福島大学長 入野 修
13:10～13:30 中学生及び高校生による発表

【第2部】 13:30～14:30

基調講演:「これからの復興に向かって」

室崎 益輝 氏 関西学院大学総合政策学部教授、日本災害復興学会会長

— 休憩 —

【第3部】 14:45～16:30

シンポジウム:「ふたばはひとつ」 ～双葉地方のまちづくり・未来づくり～

<パネリスト> ●自治体の代表
●商工会又は産業会の代表
●青年会議所の代表
●子どもを持つ親の代表
●福島大学行政政策学類准教授 丹波 史紀

<コーディネーター> ●うつくしまふくしま未来支援センター長 山川 充夫

<コメンテーター> ●基調講演講師 室崎 益輝 氏

主催:福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

■共催:双葉地方町村会、双葉地方町村議会議長会 ■後援:福島県、福島県教育委員会、福島民報社、福島民友新聞社、河北新報社

お問い合わせ

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター事務局

TEL 024-504-2865 FAX 024-504-2865 E-Mail fure@adb.fukushima-u.ac.jp